

第9回 俳優・佐藤慶、貧乏時代・ガリ版との日々

その若き日と主要な作品



佐藤慶さんの自宅にて（1997年4月）

かつて連続テレビや映画への出演、そしてナレーターとして活躍し、平成22年（2010）5月に81歳で亡くなった名優・佐藤慶は、ガリ版印刷の名手でした。

×

佐藤慶は昭和3年（1928）12月21日、会津若松市に生まれました。「私とガリ版との出会いは、小学校五・六年生の頃、生家の蔵の中から『堀井謄写堂製』と書かれたガリ版一式を偶然発見したことから始まります」と、生前インタビューした時、お聞きしました。幼い頃から絵よりも文字を書くことの方に興味があり、時間割表を作って級友に配ったり、自分の書いたものが何枚もそのまま作れるガリ版印刷がおもしろくて仕方がなかったそうです。やがて昭和21年（1946）に会津若松市役所に就職し、戸籍係に配属となりますが、その頃に作った印刷物が僅かですが残っています。

「会津若松で劇団をつくって県の大会にでたところ、大賞をとりました。地元に戻り、凱旋公演ということでお歴々の前で披露。ここまではよかったのですが、無断で市役所を休んで大会に出たのがわかってクビになりました」。辞めた理由はそれだけではなかったのだろうが、親の反対を押し切って上京。会津での演劇活動に限界を感じたというのが本当のようです。

「この頃は面白いということだけで見よう見まねでガリ版印刷をやっていました。会津で劇団作って芝居やっていた頃です。この時代の作品はもう酷いんです。家に残っていたいかげんなやすりと、いかげんな原紙で書いたからね」と、当時の作品を前に振り返っています。

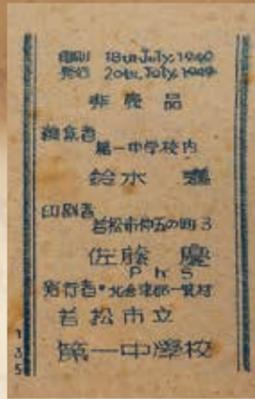
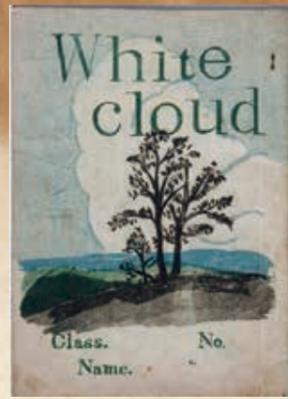
上京はしたものの、俳優への道はきびしかったのです。勘当同然のために親からは一円の仕送りもなく、「芸が身を助けるほどの不仕合わせ」とはこのことだが、

子どもの頃から見よう見まねで身につけていったガリ版の筆耕で稼ぐしかないと考えて、同郷の友人から紹介してもらったのが「耕文社」という素人集団のガリ版屋。ここでの一番大きな仕事は文部省検定教科書の下刷りでした。

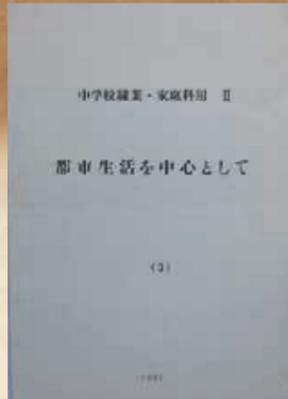
「教科書検定になる下書きです。つまり1ページをこの大きさに書いて、原紙に直接執筆者の校正を受けて、三校ぐらいやって、やっとOKが出て、今度は刷り専門の人がいて刷りに入るわけです。それを1冊にまとめて送ると、それが凸版印刷とか大日本印刷とかに教科書原稿となって行くという方法。今はおそらくワープロでやっているんでしょうけど。漢文はもちろん、社会、国語、数学、英語、いろいろあったんです。十何人で書いて。文字はまちまちです。工賃は一枚いくらです。漢文が字はでかいし一番有利でした。数学とか英語なんか受け持ったら、大変ですよ。スベル間違ったら大変でしょ。数学だったらよけい。なるべく楽なのを分捕ってね。」と当時を回想する。

その他、会社等の会報や同人誌など、仕事は多岐に渡っていた。同人誌は一冊分を請け負い、B5判で1ページあたり1550字。一日徹夜しても7・8ページが限界で、労賃は一字5銭であった為、いくらやっても500～600円にしかならず、画数の多い文字は特に大変で「憂鬱」という字を見ると今でも憂鬱になると言っていたのが印象的でした。

佐藤慶の右手中指の第一関節は他に比べて太い。本人曰く、「ガリ版だこで、刃物で切っても血が出ないくらいにかたくなっています。」葉巻のように太い鉄筆を握り続ける指には、激痛が走り、二の腕は異常な熱をもち、真冬でも共同炊事場の水道の蛇口で腕を冷やしながら書くのが常だったという。それでも、同人誌の表紙絵などには、特殊な絵画やすりを多用し多色刷りを行い、「いっぱいしのプロ気取り」でした。



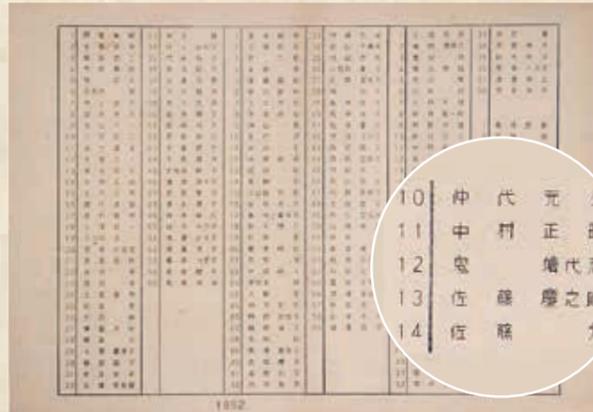
会津若松時代の印刷物 奥付に印刷者 佐藤慶とある



教科書の下刷り



堂々たる多色刷りの作品



俳優座養成学校名簿 仲代元久（達矢）、中村正昭（後の中谷一郎）、佐藤慶之助（佐藤慶）、佐藤允等が同期 一学年上に渡辺美佐子、愛川欽也、二学年上に小沢昭一がいる



角2封筒の一部



佐藤慶お手製の活字字典ノート

念願の俳優座の養成所に昭和28年（1953）に入りますが、その頃になると筆耕だけでなく印刷・製本まで自分でやり、一番のお得意先は俳優座演劇研究所でした。

「もっぱら俳優座の一手引き受けて、この頃はやっていたんです。若いグループがいて刷りを頼まれたりとか。また、授業に使うテキストや入試問題・案内状・封筒・名簿などの印刷も行ったりしたものです。文字を、自己流で書くのが嫌いで、全部印刷物から手で写すんです。小さい字だと昔の漢和辞典とか。それから、でかい文字は新聞を切り抜いておいて字典みたいに作っておくわけです。そこから写していくんですけど。いわゆる自己流の活字体というのがどうも嫌いで。なるべく活版に似せたかったんです。何冊かあったのですが、今は二冊だけ残っています。全部貼って作ったんです。毎日毎日見ていていいやつを貼って。字典一冊作るだけでもかなり何年もかかっています。」

佐藤慶が作った印刷物の中には滞納授業料の催促状があ

ります。「お宅の息子・娘が×か月滞納しているの×月×日までに必ず納めてくれ」という内容を各保護者に郵送するもので、父親も見たに違いないとのことでした。

昭和34年（1959）、「人間の条件・第三部」（小林正樹監督）に抜擢され、その演技が注目され、それを転機に貧乏生活・ガリ版生活とも別れを告げた。だが、貧乏時代の生きる糧であったガリ版の機材や作品は、何回も引っ越ししたにもかかわらず、ずっと捨てることができずに保存していた。「ワープロやパソコンは嫌いです。だって手書きがいいもの」という佐藤慶の書く文字は、ガリ版から離れて何十年にもなるのものすごくきれいです。

平成9年（1997）4月、彼が何十年も大切に保存していたガリ版機材・作品は、山形謄写印刷資料館に全て寄贈されました。以前にご覧になった方もいらっしゃると思いますが、素晴らしいものばかりですので、是非一度ご覧いただければと思います。